

山口大学の入学者モデルの検討

—多様な入学者の受け入れを目指して—

林 寛 子

要旨

2021 年度入試からの実施を目指した大学入試改革は、改革の柱であった大学共通テストにおける記述式問題の導入、大学入試英語成績提供システムの導入、大学入試の選抜資料として高校調査書の積極的活用が見送られ、大学は引き続き検討をしなければならない。18 歳人口が減少する中、大学は日本人の 18 歳入学者を主な対象として想定してきた従来のモデルから脱却する必要がある。山口大学における次なる入試改革の課題は何であるのか、山口大学の入試の現状、山口県の高校生の状況を再検討することが本稿の目的である。

キーワード

全日制普通科、専門学科、入学者受け入れ、特別選抜

1 はじめに

2021 年度入試からの実施を目指した大学入試改革において、大学は、多様な背景をもつ人に、多様な入試方法、多様な評価尺度で大学入試を実施することが求められてきた¹⁾。しかし、この大学入試改革は、改革の大きな柱であった大学共通テストにおける記述式問題と大学入試英語成績提供システムの導入が見送られた。また、各大学における個別選抜については、学力の三要素を評価することが求められ大学入試の選抜資料として高校調査書を積極的に活用することが入試改革の柱であったが、調査書の活用についても保留となり、今後の方針は示されておらず各大学に任されている状況にある。

2021 年度入試を目指して入試改革をすすめてきたものの、入試改革の柱の部分が宙に浮いてしまった状態であるため、今後の山口大学の入試改革の方向性を見定める上においても山口大学の課題は何であるかを再確認する必要がある。

中央教育審議会の答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」(2018 年)では、「今後、高等教育機関は、18 歳で入学する日本人(18 歳入学者)を主な対象として想定するという従来のモデルから脱却し、社会人や留学生を積極的に受け入れる体質転換を進める必要がある。」とある。18 歳人口は、2040 年には 88 万人に減少し、現在の 7 割程度の規模となる推計が出されていることを前提に、各機関における教育の質の維持向上という観点から規模の適正化を図った上で、社会人及び留学生の受け入れの拡大を図っていくことが求められている。

このことは、多様な価値観や経験、能力を持つ学生の受け入れであり、これまで 2021 年度入試を目指した入試改革ともつながっている。大学は、今後も多様な価値観や経験・能力をもつ学生の受け入れのために努めなければならない。しかし、入学者のモデルをすぐに日本人の 18 歳入学者から脱却することは簡単なことではない。答申においては 2040 年

に向けて18歳、社会人、留学生それぞれの受け入れのあるべき方向性が示しているが、受け入れ規模の人数や割合等は示されていない。いずれにしても、2040年に向けての入学者の受け入れは「多様性」がキーワードであることは確かである。

入学者の受け入れにおいて「多様性」が求められているものの、2021年度入試からの実施を目指した大学入試改革は、主に全日制高校新卒者に焦点を当てた入試改革であった(林2020)。この入試改革は引き続き新学習指導要領に対応する初年度の大学入試となる2025年度入試に向けて検討されることになっている。

山口大学の入試実施状況は、志願者、受験者、入学者は全日制普通科の高校新卒者がほとんどである。こうした状況下で、山口大学における次なる入試改革の課題は何であるのか、「全日制普通科新卒者」以外の多様な入学者を受け入れるために何が課題となるのか、山口大学の入試の現状、山口県の高校生状況を再検討することが本稿の目的である。

2 山口大学の現在の入学者モデルとその背景

2.1 山口大学の入学者モデル

山口大学の入試は、大学入学共通テストを課す入試と、大学入学共通テストを課さない入試に分けられる。大学入学共通テストを課す入試は前期日程、後期日程、学校推薦型Ⅱ(旧推薦入試Ⅱで、以降、学校推薦型選抜Ⅱと示す)、大学入学共通テストを課さない入試は総合型選抜(旧AO入試で、以降、総合型選抜と示す)、学校推薦型選抜Ⅰ(旧推薦入試Ⅰで、以降、学校推薦型Ⅰと示す)、帰国生徒入試、社会人入試、私費外国人入試である。

表1は2019年度入試の定員である。山口大学は、制度としては様々な入試制度を整えているが、学部で見た場合実施されていない入試が多い。特に、帰国生徒入試は2学部、

社会人入試は1学部しか実施しておらず、また定員はなく若干名となっている。しかし、山口大学の場合、帰国生徒や社会人は総合型選抜に出願可能であり、実際、合格している者もいる。そのため、総合型選抜を実施していない学部が帰国生徒入試、社会人入試を行っていることになる。

帰国生徒入試、社会人入試、私費外国人入試は18歳の日本の高校新卒者を含まない入試であるため、これまで山口大学の入試分析では調査対象から除外してきた。帰国生徒入試、社会人入試は実施学部も少ないため、志願者、受験者、合格者ともに少数である。対象者が少ないため、2015年度入試から2019年度入試までの5か年の合計で確認すると表2のとおりである。

表3は2015年度入試から2019年度入試までの前期日程、後期日程、学校推薦型選抜Ⅰ、学校推薦型選抜Ⅱ、総合型選抜の志願者・受験者・合格者の合計を示したものである(林2020)。山口大学の場合、総合型選抜に帰国生徒、私費外国人に該当する受験生も受験可能であり、その他としてカウントされるが、実際の志願者・受験者・合格者は少ない。山口大学の前期日程、後期日程、学校推薦型選抜Ⅰ、学校推薦型選抜Ⅱ、総合型選抜の志願者・受験者・合格者は、表3のとおり日本の全日制高校を卒業した者がほとんどである。

表4は5か年のうちのある年度入試(A年度)の全日制高校の学科別受験者・合格者を示したものである。山口大学は、普通科の受験者・合格者がほとんどである。

また、A年度入試の受検者・合格者の現役、現役以外の別を確認したところ、受験者は現役79.9%、現役以外20.1%、合格者は現役80.3%、現役以外19.7%であった。以上のことから、現在の山口大学の入学者のモデルは「全日制普通科新卒者」と言える。

表 1 2019 年度入試の定員

学部・学科	入学定員	共通テストを課さない入試				共通テストを課す入試			
		総合型選抜	学校推薦型選抜Ⅰ	帰国生徒入試	社会人入試	私費外国人入試	学校推薦型Ⅱ	前期	後期
人文学部人文学科	185	7				若干名	30	115	33
教育学部	180	20	9			若干名	10	141	
経済学部	345	30	78			若干名		181	56
理学部	数理科学科	50	5			若干名		35	10
	物理・情報科学科	60	5			若干名	5	33	17
	生物化学科	80	4	8		若干名		47	21
	地球圏システム科学科	30	4			若干名	4	15	7
医学部	医学科	107				若干名	42	55	10
	保健学科看護学専攻	80		若干名	若干名	若干名	10	50	20
	保健学科検査技術科学専攻	40		若干名	若干名	若干名	8	25	7
工学部	機械工学科	90	6			若干名	12	54	18
	社会建設工学科	80	8			若干名	10	45	17
	応用化学科	90	8			若干名	9	58	15
	電気電子工学科	80	8			若干名	8	48	16
	知能情報工学科	80	6			若干名	8	50	16
	感性デザイン工学科	55	3			若干名	4	34	14
	循環環境工学科	55	5			若干名	6	34	10
農学部	生物資源環境科学科	50		10	若干名	若干名		33	7
	生物機能科学科	50		10	若干名	若干名		31	9
共同獣医学部獣医学科		30				若干名	3	21	6
国際総合科学部国際総合科学科		100	10					80	10

表 2 帰国生徒入試・社会人入試・私費外国人入試 5 か年の実施状況

(2015 年度～2019 年度入試)

	帰国生徒	社会人	私費外国人
志願者	32	23	181
受験者	27	21	165
合格者	12	2	75

表 3 5 年間の出願資格別志願者・受験者・合格者数

(2015 年度～2019 年度入試)

		前期日程	後期日程	学校推薦型選抜Ⅰ	学校推薦型選抜Ⅱ	総合型選抜
志願者	全日制	17384	9647	1426	2390	1931
	定時制	16	8	2	1	2
	通信制	79	30	3	4	2
	その他	97	30	1	0	8
受験者	全日制	16827	5644	1426	2374	1689
	定時制	15	5	2	1	2
	通信制	77	14	3	4	0
	その他	94	20	1	0	7
合格者	全日制	7086	2037	617	703	610
	定時制	4	0	1	0	0
	通信制	24	2	0	2	0
	その他	26	6	0	0	4

※林(2020)をもとに作成

※その他は高卒認定を含む日本の高校を卒業した者以外の出願資格者

表4 A年度入試の全日制高校の学科別受験者・合格者

	受験者		合格者	
	人数	%	人数	%
普通科	4913	90.0	2015	88.5
理数科	232	4.2	104	4.6
農業科	3	0.1	3	0.1
工業科	28	0.5	8	0.4
商業科	88	1.6	52	2.3
総合学科	131	2.4	60	2.6
上記以外の学科	65	1.2	36	1.6
合計	5460	100.0	2278	100.0

山口大学は、中央教育審議会の答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」に従って、入学者の受け入れを転換していくとすれば、この入学者のモデルの構造を変化させていかなければならない。「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」の本文中に「社会人や留学生を積極的に受け入れる体質転換を進める必要がある。」と記されているため、社会人入試や私費外国人入試を見直すことは重要かもしれない。しかし、山口大学は、社会人や私費外国人だけでなく、全日制普通科以外の18歳年齢すら受け入れている状況にはない。

山口大学は、ダイバーシティ・キャンパスの実現を目指し、多様な価値観や経験、能力を持つ学生を受け入れ、また、高等学校教育で育まれた総合的な学力を発展・向上させるため、大学教育との接続に配慮した多様な評価・入試方法等の改善に取り組まなければならない。そのためには、「全日制普通科新卒者」以外の入り口を整備しなければならない。

2021年度入試を目指して進めてきた入試改革は大学入学共通テストを中心とする改革であり、主として全日制普通科の高校生が対象となる改革であったことから、2022年度入試以降の入試改革は大学入学共通テストを課さない特別選抜の再編を通じて、全日制普通科以外の全日制の専門学科や定時制、通信制などの入学者の入り口を整備を検討することも重要な課題となるだろう。その課題を解決するためには、大学受け入れの基準や入学者

に求める資質能力について大学が今以上に明確に示す必要が出てくるだろう。

しかし、山口大学の場合、全日制普通科新卒者以外の入学者を獲得するには厳しい状況がある。山口大学は、山口県の高校教育の特殊性を押さえておく必要があると考える。

2.2 山口県の高等学校卒業者の卒業後の状況

山口大学の入学者のうち、山口県出身者の割合は、例年25%程度である(図1)。人数にして約500人程度しか山口県から山口大学に入学していない。山口県の平成31年3月の高等学校(全日制課程・定時制課程)の卒業生数は10,980人である。そのうち、普通科を卒業した者が6,261人である。

平成31年3月高校卒業者の大学・短大進学率は普通科では59.4%、山口県全体では43.1%である(表5)。全国の大学等進学率は54.7%で、山口県の大学・短大進学率は沖縄(40.2%)に次いで2番目に低い県である。それに対し、山口県の卒業生に対する就職率(表6, 図2)は30.9%で、全国平均よりも高い。現在のような状況は、平成10(1998)年頃から生じており、既に20年近く山口大学の入学者受け入れの背景となっている。この山口県の大学等進学率の低さは、山口県の工業高校の実態がもたらすものである。

日本銀行下関支店は、山口県金融・経済レポート「高校新卒者の就職状況にみる山口県の工業高校の強さと魅力」を2010年5月に発表している。このレポートによると、山口

図1 山口大学入学者の出身地

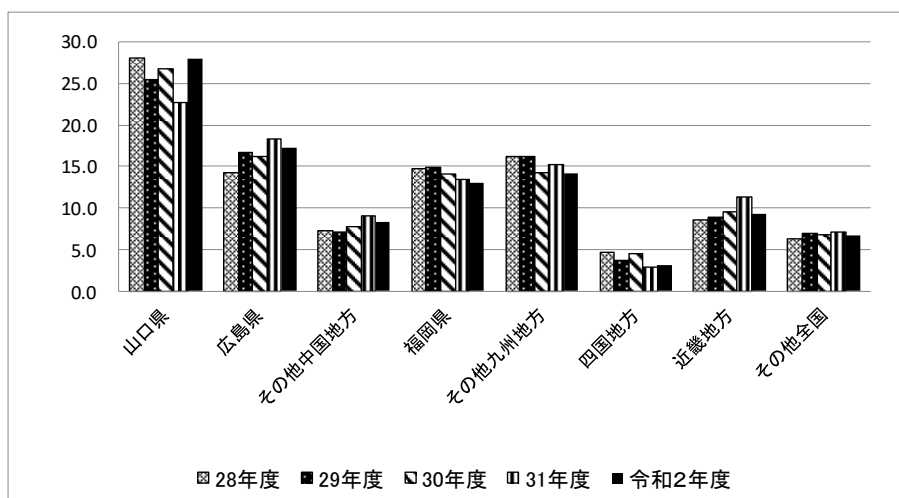


表5 平成31年3月高校卒業者の高校学科別大学・短大進学者

	山口県			全国		
	卒業生数	大学等 進学者数	大学等 進学率 (%)	卒業生数	大学等 進学者数	大学等 進学率 (%)
普通	6,261	3,721	59.4	770,346	492,570	63.9
農業	327	38	11.6	25,523	3,600	14.1
工業	1,596	97	6.1	79,523	11,390	14.3
商業	1,211	218	18.0	62,413	16,334	26.2
水産	43	14	32.6	2,856	484	16.9
家庭	283	88	31.1	12,333	3,190	25.9
看護	212	129	60.8	4,488	3,879	86.4
情報	—	—	—	947	351	37.1
福祉	78	22	28.2	2,742	529	19.3
その他	285	193	67.7	34,227	23,033	67.3
総合学科	684	208	30.4	55,161	18,948	34.4
合計	10,980	4,728	43.1	1,050,559	574,308	54.7

※大学等進学率は、大学・短期大学への進学者の進学率

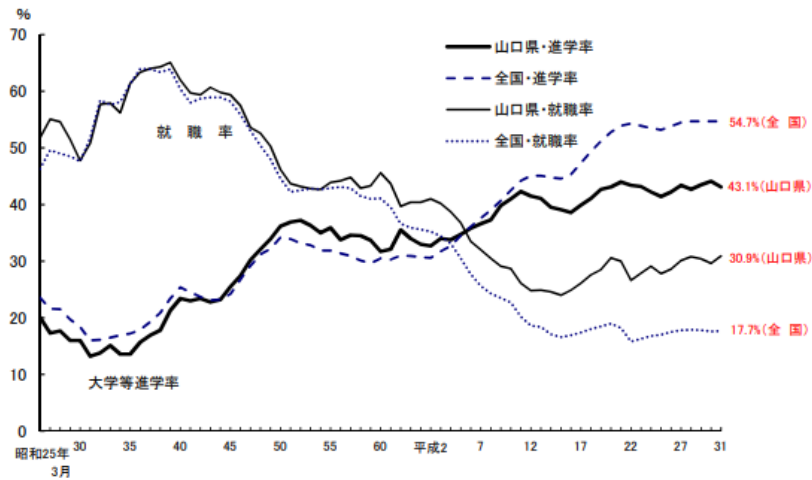
出所：文部科学省「学校基本調査」、山口県「令和元年度教育統計調査結果報告書」

表6 平成31年3月高校卒業者の高校学科別就職者

	山口県			全国		
	卒業生数	就職者数	卒業生に対する 就職率 (%)	卒業生数	就職者数	卒業生に対する 就職率 (%)
普通	6,261	807	12.9	770,346	64,726	8.4
農業	327	189	57.8	25,523	13,718	53.7
工業	1,596	1,373	86.0	79,523	54,256	68.2
商業	1,211	641	52.9	62,413	27,083	43.4
水産	43	21	48.8	2,856	1,844	64.6
家庭	283	99	35.0	12,333	4,640	37.6
看護	212	34	16.0	4,488	119	2.7
情報	—	—	—	947	250	26.4
福祉	78	41	52.6	2,742	1,347	49.1
その他	285	13	4.6	34,227	2,104	6.1
総合学科	684	177	25.9	55,161	15,476	28.1
合計	10,980	3,395	30.9	1,050,559	185,563	17.7

出所：文部科学省「学校基本調査」、山口県「令和元年度教育統計調査結果報告書」

図2 山口県の大学等進学率及び就職率の推移（高等学校卒業生）



(注) 昭和58年以前の大学等進学率は、大学・短期大学の通信教育部への進学者を含まないものである。

出所：文部科学省「学校基本調査」、山口県「令和元年度教育統計調査結果報告書」

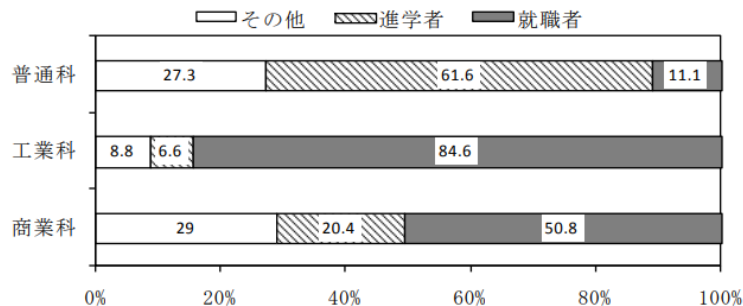
表7 都道府県別にみた工業科の生徒数の割合（平成21年3月現在）

順位	都道府県	工業科生徒数(人)	全高生に占める割合(%)	順位	都道府県	工業科生徒数(人)	全高生に占める割合(%)	順位	都道府県	工業科生徒数(人)	全高生に占める割合(%)
1	佐賀	4,118	15.2	17	沖縄	5,181	10.4	33	全国	267,289	8.0
2	山形	5,174	14.7	18	栃木	5,845	10.3	34	広島	5,981	7.9
3	青森	6,056	14.4	19	福井	2,440	10.3	35	兵庫	10,940	7.7
4	山口	5,247	14.2	20	岐阜	5,774	10.1	36	静岡	7,773	7.6
5	宮崎	4,802	13.9	21	群馬	5,202	9.7	37	山梨	2,057	7.5
6	大分	4,514	13.3	22	長崎	4,355	9.6	38	滋賀	2,784	7.3
7	熊本	6,955	13.2	23	三重	4,939	9.6	39	新潟	4,673	7.0
8	富山	3,651	13.0	24	徳島	2,041	9.6	40	茨城	5,582	6.8
9	鹿児島	6,826	12.7	25	愛知	17,771	9.4	41	大阪	14,621	6.7
10	福島	7,765	12.4	26	福岡	12,380	9.3	42	北海道	9,566	6.6
11	石川	3,814	11.9	27	鳥取	1,570	9.1	43	埼玉	9,305	5.4
12	岡山	6,001	11.0	28	香川	2,272	8.7	44	奈良	1,801	4.7
13	愛媛	4,169	11.0	29	和歌山	2,608	8.7	45	東京	14,576	4.7
14	高知	2,330	10.9	30	宮城	5,440	8.5	46	神奈川	8,156	4.3
15	岩手	4,321	10.8	31	島根	1,727	8.4	47	京都	2,279	3.2
16	秋田	3,231	10.7	32	長野	4,887	8.1		千葉	3,789	2.6

(資料) 文部科学省「学校基本調査」

出所：日本銀行下関支店 柵木雄介（2010）、岩下直行（2010）

図3 学科別にみた新卒者の進路（2009年3月卒業生）



「その他」は、本統計上の「専修学校（専門課程）進学者」、「専修学校（一般課程）等入学者」、「公共職業能力開発施設等入学者」、「一時的な仕事に就いた者」などの合計。

(資料) 山口県「学校基本調査」

出所：日本銀行下関支店 柵木雄介（2010）、岩下直行（2010）

県の全高校生に占める工業科生徒数の割合は全国で4番目に高く(表7)、山口県は工業高校の新卒者が多い県であること、また学科別に見た新卒者の進路(図3)では、卒業後直ちに就職する割合が工業科は8割強で高卒就職者の中では工業科出身者が最も高くなっていることが示されている。その状況は、10年がたった現在においても、ほぼ同様の状況にある。表6から全高校生に占める工業科生徒の割合を算出すると14.5%である。卒業後直ちに就職する割合は、平成31年は68.2%であり、10年前から16.4%低下しているが高卒就職者の中では工業科出身者が最も高くなっている。

日本銀行下関支店の山口県金融・経済レポートは、山口県の高校生の就職面での強さは工業高校の貢献が大きいと指摘した上で、さらに、山口県の工業高校の強さの背景について、山口県が人口10万人を超える市が複数存在する分散型の県であること、また山口県が工業県であることを指摘している。山口県は、明治維新後、岩国に製糸工場が置かれたのを皮切りに、小野田のセメント、宇部の石炭、下関の海運などで産業の近代化が進み、大正から昭和初期にかけては、岩国、周南、宇部、下関に化学、鉄鋼、機械工業が興り、昭和30年代には瀬戸内海沿岸に石油化学コンビナートが相次いで建設され、工業基盤が固まったこと、そして、工業県山口を支える産業の担い手を育成するために県内各都市に設置されたことを説明している(岩下2010)。つまり、製造業に恵まれた山口県は、工業高校の生徒の就職環境は整っており、これらの企業を身近な存在として感じ育つことのできる理想的な環境と説明している。また、2009年3月卒業の高卒就職者3,531人中2,817人が県内へ、714人が県外へ就職していることを確認している。

山口県の専門学科、特に工業科の高校生は、地元山口で職を得て、生活をしていく流れが

整っていると言える。これは、一つの理想的な形であろう。しかし、今後20年変わらず維持され続けるとは限らない。コロナ禍において産業界で起きている変化をとらえ、これに適応しうる人材に育成することが工業科だけでなく、専門学科に求められている。山口大学としては山口県の産業構造や若者の大学卒業後の進路も考慮しながら、高校生に大学進学意識を形成していくこと、あるいは、中学生が高校を選択していく際に大学進学への意識の形成を働きかける必要も生じているのではないと考える。

しかし、現在の山口大学の入学者受け入れは、大学入試改革が全日制普通科を対象としていたこともあり、工業高校をはじめ専門学科の生徒にとっては魅力的ではないかもしれない。今後、全日制普通科新卒者以外の受け入れを進めていくためにも、山口大学の実態を確認し、課題を把握する。

3 山口大学における専門学科の受験者、入学者の実態

3.1 高校学科別の受験者の状況

2015年度入試から2019年度入試までの間のある年度入試の山口大学受験者の高校学科別出願学部(表8)をみると、農業科の生徒は農学部のみ出願している。商業科の生徒は95.5%が経済学部で、人文学部3.4%、工学部に1.1%である。農業科と商業科は高校の学びが関連する大学の学部に関係しているが、工業科は関連する工学部への出願が67.9%、理学部への出願が14.3%で、直接的にはつながりが薄い教育学部、経済学部に関係する学部への出願が7.1%、国際総合科学部に3.6%みられる。専門学科の教育を通して興味の変更はありうることであろう。

山口県の工業科は、製造業への就職のルートが整っていることから、成績上位者は学校推薦で就職していくため、山口大学への出願は少ない。山口大学の工業科の受験者がどの

表 8 受験者の高校学科別の出願学部

		人文学部	教育学部	経済学部	理学部	医学部	工学部	農学部	共同獣医学部	国際総合科学部	合計
普通科	度数	634	508	716	677	701	981	237	162	297	4913
	%	12.9%	10.3%	14.6%	13.8%	14.3%	20.0%	4.8%	3.3%	6.0%	100.0%
理数科	度数	7	10	13	40	75	63	9	10	5	232
	%	3.0%	4.3%	5.6%	17.2%	32.3%	27.2%	3.9%	4.3%	2.2%	100.0%
農業科	度数	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3
	%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
工業科	度数	0	2	2	4	0	19	0	0	1	28
	%	0.0%	7.1%	7.1%	14.3%	0.0%	67.9%	0.0%	0.0%	3.6%	100.0%
商業科	度数	3	0	84	0	0	1	0	0	0	88
	%	3.4%	0.0%	95.5%	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
総合学科	度数	19	12	29	22	7	30	3	1	8	131
	%	14.5%	9.2%	22.1%	16.8%	5.3%	22.9%	2.3%	0.8%	6.1%	100.0%
上記以外の学科	度数	11	6	10	5	3	12	7	1	10	65
	%	16.9%	9.2%	15.4%	7.7%	4.6%	18.5%	10.8%	1.5%	15.4%	100.0%
全体	度数	674	538	854	748	786	1106	259	174	321	5460
	%	12.3%	9.9%	15.6%	13.7%	14.4%	20.3%	4.7%	3.2%	5.9%	100.0%

表 9 受験者の高校学科別の出身地域

	北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄	合計	参考：山口県	
普通科	0.5%	3.0%	3.8%	10.4%	50.5%	31.9%	100.0%	1186人	24.1%
理数科	0.4%	0.9%	3.4%	3.9%	65.5%	25.9%	100.0%	115人	49.6%
農業科	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%	100.0%	1人	33.3%
工業科	0.0%	3.6%	7.1%	10.7%	57.1%	21.4%	100.0%	7人	25.0%
商業科	0.0%	0.0%	0.0%	14.8%	54.5%	30.7%	100.0%	20人	22.7%
総合学科	0.8%	0.0%	0.8%	8.4%	72.5%	17.6%	100.0%	31人	23.7%
上記以外の学科	0.0%	6.2%	6.2%	24.6%	13.8%	49.2%	100.0%	4人	6.2%
合計	0.5%	2.8%	3.7%	10.3%	51.3%	31.4%	100.0%	1364人	25.0%

表 10 受験者の高校学科別の入試区分

	前期日程	後期日程	学校推薦型 選抜Ⅰ	学校推薦型 選抜Ⅱ	総合型選抜	合計
普通科	62.3%	21.0%	4.1%	8.1%	4.5%	100.0%
理数科	52.6%	17.7%	1.7%	18.5%	9.5%	100.0%
農業科	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	100.0%
工業科	25.0%	3.6%	3.6%	7.1%	60.7%	100.0%
商業科	2.3%	1.1%	48.9%	0.0%	47.7%	100.0%
総合学科	39.7%	19.1%	10.7%	9.2%	21.4%	100.0%
上記以外の学科	58.5%	15.4%	4.6%	4.6%	16.9%	100.0%
合計	60.1%	20.4%	4.9%	8.4%	6.3%	100.0%

地域から集まっているのか確認すると(表9)、中国・四国57.1%で、近隣の九州・沖縄近畿地方だけでなく、近畿、中部、関東からも受験がある。他県の工業科は山口県のように恵まれた就職環境が整っていなければ、一つの選択肢として大学進学を目指す進路指導が行われているはずである。受験者の高校学科別出願した入学区分は表10のとおりである。農業科と工業科は共通テスト(旧センター試験)を課さない特別選抜(学校推薦型選抜Ⅰ、

総合型選抜)受験者が6割を占めている。商業科は、共通テストを課さない学校推薦型選抜Ⅰ、総合型選抜を合わせると96.6%になる。専門学科の受験者は多くが特別選抜を受験している。

次に、高校調査書について確認する。高校調査書の「評定平均値」や「出欠の記録」がどのような記載状況にあるのか、山口大学の2015年度入試から2019年度入試のうち、A年度入試の受験者、合格者のデータから全日

制高校出身者のみのデータを用いて分析した。高校調査書は全日制、定時制、通信制高校出身者から提出があり、高等学校以外の出願資格者（帰国生徒・私費留学生・高等学校卒業程度認定試験・高等専門学校等）には調査書はない。また、高等学校出身者であっても、調査書の保存年限が経過した者の調査書はない。また、高等学校出身者であっても、通信制高校は基本的には出席の記載はない。定時制高校は受験者、入学者が少数であるため、全日制高校出身者のみのデータを用いて分析した。

評定値については、高校によって評価基準が異なること、また同じ高校であっても学科によって評価基準が異なることが先行研究で明らかにされている（倉元・川又 2002）。また、評定値の評価基準は地域による差があり、関東と近畿で評定基準が高いこと、公立高校と私立高校という設置者間における差がある地域もあり、関東と近畿の公立高校で評価基準が厳しい傾向にあることが明らかにされて

いる（鈴木・山本 2015）。

山口大学の受験者、合格者の高校学科別の評定平均値の平均（表 11、表 12）をみると、農業科、商業科の評定平均値が高い傾向にあるが、工業科は普通科に比べると評定平均値の平均は高いが、農業科や商業科ほど値は高くない。

次に、「出欠の記録」について確認する。「出欠の記録」には、授業日数、欠席日数が記されているが、授業日数は学校によって異なっている。概ね年間 170 日以上で 200 日前後が最も多いが、最大で 267 日と記載された高校もある。高校 3 年次は出願時までの授業日数が示されている。長期の海外留学の場合も出席日数の記載がなかったり、該当日数のみの記載になっていたりする。そのため、高校 3 年間の欠席率²⁾を算出し、データとして用いた。受験者も合格者も高校学科別高校 3 年間の欠席率（表 13、表 14）は、職業教育を行う、農業科、工業科、商業科において高校 3 年間の欠席率平均値は低い。

表 11 A 年度入試受験者の高校学科別の評定平均値の平均

	度数	評定平均値 の平均値	最小値	最大値	F 値	有意確率
普通科	4913	4.0408	2.20	5.00	24.577	0.000
理数科	232	4.1504	3.00	5.00		
農業科	3	4.6000	—	—		
工業科	28	4.2000	3.10	4.90		
商業科	88	4.6648	3.10	5.00		
総合学科	131	4.2756	2.50	5.00		
上記以外の学科	65	4.0092	2.30	4.90		
合計	5460	4.0619	2.20	5.00		

※農業科は 3 人のため最小値と最大値は表示しない。

表 12 A 年度入試合格者の高校学科別の評定平均値

	度数	評定平均値 の平均値	最小値	最大値	F 値	有意確率
普通科	2015	4.1508	2.20	5.00	11.517	0.000
理数科	104	4.2375	3.00	5.00		
農業科	3	4.6000	—	—		
工業科	8	4.3875	3.30	4.80		
商業科	52	4.7135	4.30	5.00		
総合学科	60	4.2717	3.10	5.00		
上記以外の学科	36	4.0528	2.90	4.90		
合計	2278	4.1707	2.20	5.00		

※農業科は 3 人のため最小値と最大値は表示しない。

表 13 A 年度入試受験者の高校学科別高校 3 年間欠席率の平均

	度数	欠席率の 平均値	最小値	最大値	F 値	有意確率
普通科	4913	1.1226%	0.00	30.73	2.310	0.031
理数科	232	0.9463%	0.00	11.65		
農業科	3	0.1172%	—	—		
工業科	28	0.8055%	0.00	4.53		
商業科	88	0.4315%	0.00	6.81		
総合学科	131	1.3729%	0.00	16.03		
上記以外の学科	65	1.1161%	0.00	7.63		
合計	5460	1.1077%	0.00	30.73		

※農業科は 3 人のため最小値と最大値は表示しない。

表 14 A 年度入試合格者の高校学科別の高校 3 年間欠席率の平均

	度数	欠席率の 平均値	最小値	最大値	F 値	有意確率
普通科	2015	1.0994%	0.00	19.81	2.032	0.058
理数科	104	1.0460%	0.00	11.65		
農業科	3	0.1172%	—	—		
工業科	8	0.3577%	0.00	1.37		
商業科	52	0.3297%	0.00	4.76		
総合学科	60	1.5686%	0.00	15.97		
上記以外の学科	36	1.0293%	0.00	7.63		
合計	2278	1.0868%	0.00	19.81		

※農業科は 3 人のため最小値と最大値は表示しない。

以上のことから、山口大学を受験している農業科、工業科、商業科の出身者は、山口県や近隣の県だけでなく、近畿や中部地方にも広がりがあること、高校調査書の評定平均値は高く高校の上位者であったことが予測できること、さらに、高校の指導もある可能性があるが、高校 3 年間の欠席率が低く、ほとんど欠席せずに高校生活を送った真面目な高校生であると言える。

山口県の高校卒業者が高校卒業後直ぐに県内就職という流れがある状況の中で山口大学の専門学科からの受験者数は少ないが、全国から出願があることを考えると、入学者受け

入れの方法を改善すれば、専門学科からの志願者獲得につながると考える。

なお、高校の学科別合格率(表 15)を確認すると、工業科は 28.6%と低く、農業科は 100%、商業科は 59.1%であった。

3.2 高校学科別の入学後の状況

入試改善を行い、専門学科の志願者、入学者が増加したとしても、入学後、専門学科出身の学生が不適應を起こすようであれば、入試改善の意味はない。そこで、現在の入学者の入学後の状況を確認しておく。

A 年度山口大学入学者の 2 年次後期開始時点の高校学科別入学後の現況区分(表 16)をみると、農業科、工業科、商業科は休学、退学者はいない。

在籍状況と入学後の成績について関連を分析した。入学後の成績については GPA³⁾を確認する。データは、2 年次前期までの GPA を用いる。ただし、工学部については GPA の算出方法が他の学部と異なるため、GPA の分析

表 15 A 年度入試の高校学科別合格率

	受検者	合格者	合格率
普通科	4913	2015	41.0
理数科	232	104	44.8
農業科	3	3	100.0
工業科	28	8	28.6
商業科	88	52	59.1
総合学科	131	60	45.8
上記以外の学科	65	36	55.4
合計	5460	2278	41.7

データからは除外した。工学部をデータから除いたため、工業科の学生のデータが少なくなったが、分析の結果（表 17）は、高校の学科による大学入学後の学業成績（GPA）の有意な差はない。

つまり、農業科、工業科、商業科からの入学者が入学後に学業成績が劣るとい状況にはないと言える。

18 歳人口が減少する中で、「全日制普通科新卒者」が主な入学者になっている山口大学は、今後、これまでの入学者モデルからの転換を図るために、社会人や留学生を獲得するための検討よりも、まず 18 歳人口ではあるが農業科、工業科、商業科などの専門学科から優秀な層を獲得できるように入試改善を検討することが重要であろう。

表 16 A 年度入学者の高校学科別入学後の現況区分(2 年次後期開始時点)

	在籍中	休学中	退学	合計	合計人数
普通科	98.3%	0.7%	1.0%	100.0%	1,768
理数科	98.9%	1.1%	0.0%	100.0%	88
農業科	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	2
工業科	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	8
商業科	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	52
総合学科	98.1%	1.9%	0.0%	100.0%	52
上記以外の学科	93.5%	3.2%	3.2%	100.0%	31
合計	98.3%	0.8%	0.9%	100.0%	2,001

$$\chi^2 = 1.312, df = 6, p = 0.971$$

表 17 A 年度入学者の高校学科別 GPA 比較

		度数	平均値	最小値	最大値	F 値	有意確率
1 年前期時点 全科目 GPA	普通科	1239	2.7970	0.21	3.96	1.185	0.312
	理数科	62	2.7621	1.27	3.61		
	農業科	2	2.5450	—	—		
	工業科	2	2.6200	—	—		
	商業科	52	2.8962	1.30	3.83		
	総合学科	38	2.7555	0.68	3.66		
	上記以外の学科	25	2.5784	1.15	3.80		
	合計	1420	2.7935	0.21	3.96		
1 年後期時点 全科目 GPA	普通科	1240	2.7109	0.04	3.96	0.897	0.496
	理数科	62	2.7242	1.01	3.68		
	農業科	2	2.5400	—	—		
	工業科	2	2.5500	—	—		
	商業科	52	2.7844	1.14	3.53		
	総合学科	38	2.7266	0.68	3.55		
	上記以外の学科	25	2.4888	0.92	3.80		
	合計	1421	2.7102	0.04	3.96		
2 年前期時点 全科目 GPA	普通科	1240	2.5976	0.10	3.94	1.126	0.344
	理数科	62	2.6345	0.87	3.67		
	農業科	2	2.1950	—	—		
	工業科	2	2.4050	—	—		
	商業科	52	2.6648	0.87	3.59		
	総合学科	38	2.5974	0.68	3.35		
	上記以外の学科	25	2.3496	0.69	3.75		
	合計	1421	2.5964	0.10	3.94		

(注) 農業科と工業科は人数が少ないため、最小値と最大値は記さない。

4 山口大学における入学者受け入れの課題

今後、山口大学は、「全日制普通科新卒者」以外の入学者、特に、専門学科からの優秀な層を獲得するために、現状の入試をどのように改善するのが課題になる。

2021年度入試から実施の入試改革は全日制普通科に焦点を当てた入試改革であった。この入試改革は、高校教育、大学教育、大学入学者選抜を一体とした「高大接続改革」の中にあり、改革の目玉であった英語4技能評価の民間試験活用と、国語・数学の記述式問題の導入が相次いで見送られたが、「高大接続改革」が揺らいだわけではない。共通テストは思考力や判断力を問う出題方針は変わっていない。2025年度入試を目指して、大学は引き続き検討が必要である。

しかし、高校教育は多様化が進んでおり、生徒の多様な興味・関心、進路等に応じることができるよう多様な内容を様々な方法で学ぶことができる仕組みが整っている。専門学科のように職業教育が行われる高校もある。専門学科を選択した後、大学進学への関心がわくことは起こりうることである。大学は高校教育の多様な学び、専門学科の学びをいかに評価するのが重要になる。それに伴って、大学受け入れの基準や入学者に求める資質能力について大学が今以上に明確に示す必要がある。

山口大学の場合、専門学科の受験者は特別選抜に多い。特に、共通テストを課さない学校推薦型選抜Ⅰ、総合型選抜を受験している。つまり、「全日制普通科新卒者」の入学者モデルから脱却し、多様な入学者を獲得していくためには、共通テストを課さない入試の検討が重要になるだろう。その際、専門学科を特別に対応する専門高校枠を設けることも考えられるが、その特別枠の設定だけで専門学科の生徒の受験機会を確保することにつながることは考え難い。多様な背景を持った学生を受け入れるための特別な入試枠として検討され

るよりも、誰もが受験可能な入試制度の設計という視点で大学入試を検討することも重要な課題と考える。

(アドミッションセンター 准教授)

【注】

- 1) 『高大接続改革実行プラン』（文部科学省、2015）では、各大学における個別選抜は、学力の三要素の「思考力・判断力・表現力」と「主体性・多様性・協調性」を評価することが求められ、その評価の方法として小論文、プレゼンテーション、集団討論、面接、推薦書、調査書、資格試験等を用いた評価が示され、大学入試の選抜資料として高校調査書の積極的活用が求められてきた。
- 2) 欠席率＝欠席日数／授業日数×100
- 3) $GPA = \frac{\sum (Units \times Grade Points)}{\sum (Units)}$
Grade Points＝秀4点、優3点、良2点、可1点、不可0点、理由放棄0点、Units＝単位数

【参考文献】

- (1) 大学入試センター、2018、「大学入試センター試験受験案内」、6-10, 15, 18.
- (2) 林寛子、2020、「山口大学における定時制・通信制受験資格者の大学進路選択」、『大学教育』、17巻、山口大学大学教育機構、22-32.
- (3) 岩下直行、2010、「下関工業高校創立百周年記念式典講演」
<<https://www.iwashita.kyoto.jp/assets/pdf/shimonoseki/20101125.pdf>> (2021年1月22日取得)
- (4) 倉元直樹・川又政征、2002、「高校調査書の研究—「学習成績概評A」の意味—」『大学入試研究ジャーナル』12、91-96.
- (5) 文部科学省、2015、「高大接続改革実行プランの策定」
<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/_icsFiles/fieldfile/2015/01/23/1354545.p>

- df> (2020年11月24日取得)
- (6) 文部科学省, 2018, 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」, pp14,
<https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf> (2021年1月12日取得)
- (7) 文部科学省, 学校基本調査 令和元年度初等中等教育機関・専修学校・各種学校《報告書掲載集計》卒業後の状況調査 高等学校 全日制・定時制
<https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm> (2021年1月22日取得)
- (8) 日本銀行下関支店 柵木雄介, 2010, 「山口県金融・経済レポート 高校新卒者の就職状況に観る山口県の工業高校の強さと魅力」
<<https://www3.boj.or.jp/Shimono-seki/report/report.html>> (2011年3月取得)
- (9) 鈴川由美・山本知弘, 2015, 「高等学校の調査書における学習成績概評の評価基準」『大学入試研究ジャーナル』25, 137-142.
- (10) 山口県総合企画部統計分析課, 2019, 「令和元年度 -2019-教育統計調査結果報告書 令和2年3月発行」
<<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/5/9/5/5956c6334cee1427d35b9ed286cad96b.pdf>> (2021年1月22日取得)